



TITLE:

ハイデッガーの思惟と宗教への問  
いー宗教と言語を巡って(  
Abstract\_要旨)

AUTHOR(S):

谷口, 静浩

---

CITATION:

谷口, 静浩. ハイデッガーの思惟と宗教への問いー宗教と言語を巡って. 京都大学, 2017, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2017-11-24

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.r13130>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開; 許諾条件により本文は2019-02-28に公開

京都大学	博士（文学）	氏名	谷口 静浩
論文題目	ハイデッガーの思惟と宗教への問い——宗教と言語を巡って		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、二〇世紀の哲学議論の中心であり続けたマルティン・ハイデッガー（Martin Heidegger, 1889-1976）の多様な射程を持つ思惟に対して、「宗教の本質への問い」という切り口からその思惟の核心へと迫る試みである。ハイデッガーに関して、カトリックの出自や神学研究への志向、さらにその論考の多くの箇所で見いだされる宗教の本質への言及などからも、「宗教への問い」なくして彼の思惟の歩みはなかったとすることができる。しかし他方、彼は宗教をテーマとするまとまった論考をほとんど残しておらず、彼が残した著述から彼の宗教への思索を明確にすることは非常に困難なものとなる。そのためこれまでのハイデッガー研究史において、彼の思惟を「宗教への問い」という切り口で論じる本格的な研究はごく少数であり、その少数のものには彼の思惟をキリスト教神学との関わりにおいて扱うのが常である。しかしハイデッガーがユダヤ・キリスト教の神を徹底的に問いつつ、キリスト教の神や神学の問題を超えて宗教そのものの根源へと問いを向けていることこそが、ハイデッガーの思惟を根底から突き動かしている事柄だと考えられる。すなわちハイデッガーの「神への問い」は、キリスト教の伝統のなかから出てきたものではあっても、「存在」を、「言語」を徹底して問い抜くという仕方で、キリスト教という枠を突破し、宗教一般を問う射程を持っていると考えられる。</p> <p>このような意図での考察の手がかりになるのは、O・ペゲラー (Otto Pöggeler, 1928-2014) の解釈である。ペゲラーはハイデッガーの「存在」を「強い威力を持つもの」つまり「聖性」として理解し、「宗教的次元」という概念を折に触れて用いている。ペゲラーは、宗教への問いがハイデッガーの思惟の根底に存するという見方を支持していると言える。</p> <p>そして本論文では、ハイデッガーの思惟と宗教への問いとの連関が、言語の問題に照明を当てるという仕方で解明される。ハイデッガーは宗教への問いを言語そのものの深みへと尋究するという仕方で問い続けると、論者は考えるからである。ハイデッガーの思惟は一貫して、そして後期になればなるほど「言語」へと焦点が絞られていく。ハイデッガーの言語への問いは、「人間が語るのは、言語に呼応するかぎりである。言語が語る」、「言語は静寂の鳴り響きとして語る」といった表現からも見て取れるように、日常的な言語活動へと向けられているのではなく、究極的な場面での言語使用に、「宗教的」と呼べる言語使用へと向けられている。したがってハイデッガーの言語論の解明は、彼の宗教への問いを明らかにするさいの導きとなると考えられ</p>			

る。

そこでまず序章において、以上のような本研究の基本方針が確認される。すなわちここではこれまでのハイデッガー研究の歩みを検証しつつ、本論文がペゲラーの「ハイデッガーの思惟の道には、その始まり以来、神への問いが存している」という発言や「宗教的次元」という概念に導かれるものであることが示される。

それに続いて第一章では、ハイデッガーの「思惟の由来」を尋ねることから始め、ナチズムとの関わり、第二次世界大戦後になされた自然の本質を問う思惟をたどりつつ、彼の思惟の根本性格が明らかにされる。この考察を通じて、ハイデッガーにとって思惟の由来がその後の彼の思索を導いたこと、ナチズムとの関わりは彼にとって思惟の事柄であったことが確認される。また宗教に関しては、自然の本質を問いつつ「原存在の呼びかけ」、「至高の空からの呼びかけ」に耳を傾けこの呼びかけに呼応するという仕方での「思惟による準備」に、ハイデッガーにとっての宗教的次元が見て取れることが示される。

次に第二章では『存在と時間』の時期の思惟に照明が当てられる。すなわち『存在と時間』を準備する思惟、『存在と時間』およびそれに続く思惟が講義録に基づいてたどられ、この思惟が畢竟「超越と自己」の問題に至ることが示される。「超越と自己」、とりわけ「超越」は、存在了解の地平としての「とき性(Temporalität)」の超越性とも関連して、『存在と時間』を窮地に陥らせた問題であり、また宗教と関わる問題であることもハイデッガーは認識していた。ここで論者はその「超越」の思惟の究極に raptus (拉致) といったルター神秘主義につながる考えを見いだす。この考えから、宗教と距離を置いた感のあるこの時期のハイデッガーの思惟においても、宗教への関心がけっして失われていないことを、論者は確認する。

そして第三章では、古代ギリシアの元初的思惟との親縁性においてヘルダーリンの詩作の本質へと迫る。ギリシアの思惟の根本語 alētheia は、覆蔵性 lēthē の「非」として覆蔵性の覆いを取り除きつつ、この「非」によって破られた覆いのもとに蔵されていた「秘蔵されたもの」を「秘蔵されたもの」として護る形で言語化されたものだと言いうる。この「秘蔵されたもの」を「秘蔵されたもの」として護る努力という点でヘルダーリンの詩作は古代ギリシアの思惟と親縁性を持つことが見て取られる。この「秘蔵されたもの」の言語化可能性こそ「詩作」の意義だと考えられる。すなわち詩作としての「秘蔵されたもの」の言語化は、「秘蔵されたもの」として蔵されているものを明け開く営みであるが、それと同時に詩作の言葉は、「秘蔵されたもの」を「秘蔵されたもの」として護ることによって、秘蔵性の護持を重要な要件とする宗教が持つ宗教性の存続を可能にするものである。論者はハイデッガーの思索に基づいて、詩人の営みを、「存在の真理」を護りそれを言語化する努力、「聖なるもの」を言語化する格闘のうちに見てとる。そしてヘルダーリンの言う「詩人的に住む」とい

うあり方のうちに、「宗教的次元」の具体的な姿を見いだすのである。

次に第四章では、ハイデッガー言語論の頂点とも言うべき論考「言語への道」が解釈される。この論考でハイデッガーは、フンボルトの言語論に導かれる形で言語の深みへと分け入り、言語の本質を「人間に対して〈秘蔵されたもの〉から〈秘蔵されたもの〉へと呼びかける言語の語りの秘蔵性」のうちに見て取っている。ハイデッガーはこの「言語の語り」を「真起 (Ereignis) の語り」とも言うが、フンボルトが語る「人間性の深みから湧き出てくる言語」、「民族の精神としての民族の言語」、総じて「人間存在の根源的言語性」、「人間と世界との関わりの根源的言語性」というフンボルト言語論の根本思想は、真起の語りとしての言 (Sage) と人間との呼応というハイデッガー言語論の根本思想と相即するものであると解釈することができる。すなわち人間には、みずからの精神の働きとしての言語活動の根底に、真起の語りとしての言の語り、「秘蔵されたもの」から「秘蔵されたもの」へと呼びかける言の語りに委ねられ呼応するという根源的事態が認められるからこそ、人間存在そして人間と世界との関わりは根源的に言語によって貫かれているのである。このような真起と結びついた言語の最内奥の本質解明によって、宗教的言語の問題へと導かれることになる。

そこで第五章では、まさに宗教と言語の問題が追及される。ハイデッガーは、若き時代のルターへの傾倒、ブルトマンとの親交、そして東洋の思想家たちとの交わりといった出来事を通して、宗教的事柄を彼の思惟の根底として問い抜いていった。すなわちハイデッガーはルターからは「みずからの存在そのもの」へ関心を向け、自己存在へと問いを向けることを、ブルトマンからは信仰を「啓示という語りかけ、語りかけの言葉が聴かれることによってのみ成り立つ応答」と捉えることを、そして東アジアの宗教・哲学思想との交流のうちでキリスト教的宗教性への問いを「宗教性」そのものへの問いへと深化させることを、学んだと解される。さらに『哲学への寄与』においてハイデッガーは、相互委譲という神と人間との関係を見だし、この関係においてはその根底に存する「真起」こそが第一義であることを看取した。また科学技術との連関で、技術の危険という性格とこの危険がはらむ「恵み」を見て取ったのであるが、この「恵み」という宗教の事柄に直面しつつそれでも彼はどこまでも「存在の思惟」に止まろうとする。この神や宗教の問題は、ハイデッガーの思惟を根底において衝き動かすものであると同時に、彼にとって言語の本質への問いとして思索されるべきものであった。

最後に第六章では、宗教の言語として「神話の言語」が問題とされる。そのさい、ハイデッガーが若き日に直接討論の場を持ったカッシーラーの神話論が導きとされる。もっともハイデッガーはカッシーラーを正当に評価しているわけでもカッシーラーに倣って神話を正面から問題にしたわけでもなかったが、ハイデッガーの「宗教と言語」への問いにおいて神話の問題はけっして等閑に付しうるものではなかった。ハ

ハイデッガーはとりわけギリシアの神話に即して、神話を、宗教的真理を語る言語の可能性と見なしたとすることができる。もちろん神話の言語によって彼の宗教的言語への問いに解答が与えられたわけではないが、宗教的言語のひとつの可能性が示されたということとはできると思われる。

このような仕方では、ハイデッガーの思惟が「宗教の本質への問い」を内包するものと捉え、その焦点となるのが言語への問いであると考えて、その思想展開を解明している。そして終章では、以上のような解明を受けて、このようなハイデッガーの思惟によって私たちの宗教理解にどのような知見が加えられたのかが考察される。そのためにまず従来の宗教理解が確認される。すなわち宗教は、何らかの「聖なるもの」の体験に基づく多種多様な現象、しかも本質的に言語的現象であるが、この現象の核心となる「人間の救済」を巡って、「己事究明」をその柱とする仏教のような「自己存在への問いとしての宗教」と、キリスト教やイスラームといった唯一神教に見られるような「超越者の語りかけとしての宗教」という二つのタイプに大きく分けられる。また宗教において「人間の救済」に関して、人間存在を絶対的に超えた「超越の次元」（超越者）、「超越の次元」からの語りかけ（啓示）とこの語りかけにともなう「恩寵」、そしてこの語りかけに対する応答を通じて人間に拓かれる「宗教的次元」といった事柄が肝要となる。このような宗教理解には、その中心に超越的なものからの「語りかけ」が存しており、それは一見超越的なものが現れないかのように思われる「自己存在への問いとしての宗教」のなかにも見て取ることが可能である。そしてこのことから宗教とはまさに言語の事柄であると考えることができる。

本論文ではハイデッガーの思惟を踏まえつつ、詩作の根本構造のうちに、「超越の次元からの語りかけ」によって始まる宗教と言語との根本のあり方が見て取られ、詩人のおこないが人間の言語でありながら人間の言語を超えようとする宗教的営みとして解釈された。すなわちヘルダーリンの言う「詩人的に住む」というあり方のうちに、「宗教的次元」の具体的な姿が見いだされたのであった。詩作の言葉は「〈秘蔵されたもの〉を明け開きつつ、同時に〈秘蔵されたもの〉を〈秘蔵されたもの〉として護る言葉」であり、しかもそれは神々の目くばせを受容し神々の語りかけに応える人間の言葉であり、「超越の次元」に届く可能性を保持するものと考えられる。また言語の根源としての言の語りは、人間に対して「秘蔵されたもの」から「秘蔵されたもの」へと呼びかけるものであった。すなわち詩作の言葉は、そしてそもそも言語は、その根源に「秘蔵されたもの」を蔵しそれを護るものであることが明らかにされた。この「秘蔵されたもの」のうちにこそ、そしてこの「秘蔵されたもの」を語る言語の試みにこそ、論者は宗教の根源を見いだすことができると考える。そしてこの宗教の根源を教えてくれるものが、まさしくハイデッガーの思惟であった。ハイデッガーにとって神の問題は「存在」への問いと別物ではなく、存在の「真理」の生起と一

つに問われた——このことこそハイデッガーの「宗教への問い」にとって肝要な点であると言える。それ故彼の神への問いにおける根本語は「真起」ということになる。真理の問題の核心に観取されるのが「秘蔵されたもの」であり、この「秘蔵されたもの」のうちにこそ宗教と言語とを結びつける要諦が見いだされるのである。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、マルティン・ハイデッガーの哲学を貫くものは「宗教の本質への問い」であるとする立場から、その哲学思想全般を読み解いたものである。本論文の特色は、その際の「宗教の本質」の捉え方にある。

ハイデッガーの著作のなかには神や神学、神話について独自の仕方での言及があり、キリスト教神学者たちが特にそれらに強い関心を示してきた。ハイデッガーの言説には伝統的な神学の立場に対する批判が含まれているにも拘らず、神学がそこから成立する基盤へと還り、その基盤を問い直すという性格が含まれていたからである。その問い直しのなかに新しい神学的言述の可能性を探求することは、現代の神学者たちの意欲的な試みであると言えよう。その一方で、後期ハイデッガーの神や神話をめぐる言説には古代ギリシアへの強い愛着が認められることから、キリスト教の神とは異なる新しい神の構想をそこに読み取ることはハイデッガー解釈の一つの流れとなっている。その場合にはハイデッガーの言葉遣いに即したいっそう踏み込んだ解釈がなされ得るが、そのような解釈はハイデッガー研究者だけにしか共有され得ない閉じた言説世界を形成するものとして、しばしば批判の対象となっている。他方ハイデッガーの謎めいた語り口に困惑を感じる哲学研究者たちは、その類の言説を無視するか、あるいは無視しないまでも周辺的な語りに過ぎないという扱いをすることも多い。

ハイデッガーのそのような、扱いの難しい言説に対して、論者のとる態度は明確である。論者が「宗教の本質への問い」と言う場合の「宗教」は、キリスト教でも古代ギリシアの宗教でもない。また仏教などの東洋の宗教でもない。そうではなく、論者はこの場合、強い意味で宗教一般を指している。それは、ハイデッガーの宗教への関心が特定の宗教に限定されていないということを主張するだけでなく、ハイデッガーは特定の宗教的表象のもう一つ向こうを見ようとしているという主張でもある。その向こうとは「宗教そのものの根源」に他ならない。その根源は思索によってそこへと迫ってゆくことのできるものであるが、概念化され得るものではない。したがってすべての宗教に共通する宗教一般を一つの概念に収斂させるというようなことは、本論文ではなされない。

このような立場をとることにおいて、本論文は田辺元、九鬼周造から始まり辻村公一、上田閑照に至る京都学派の人々のハイデッガー解釈の系譜のなかに位置付けられると共に、その系譜に顕著に見られる禅仏教への傾斜から免れている点で独自の意義を持つとすることができる。辻村や上田の解釈を受け継ぐことで、ハイデッガー哲学の宗教性に対する深い洞察が本論文において可能となっている。しかし同時に、禅仏教をも特定の宗教の立場と見る立場をとることで、本論文はハイデッガーの思索世界にいっそう寄り添った解釈となっている。この立ち位置が、本論文の最も大きな意義であると言える。

このような立場をとるが故に、本論文の考察はハイデッガーの言語をめぐる思惟に集中する。ハイデッガーの哲学は前期、中期、後期を通じて、存在の出来事を追究し

ながら言語を主題的に扱っており、後期になればなるほど言語へと焦点が絞られる、と論者は解することから、宗教の本質への問いは言葉の思惟という形をとると考えるのである。この視座から考察することで、本論文には二つの特筆すべき洞察が導出されている。

第一に、ハイデッガーの神観念を“das Ereignis ereignet”という真理の根本生起との連関で明示的に論じているところに、それが見出される。ハイデッガーは言葉の語りを「真起(Ereignis)の語り」と呼び、人間の言語活動の根底に「秘蔵されたもの」から「秘蔵されたもの」へと呼びかける言(Sage)の語りに委ねられ呼応するという根源的事態を認める。そこで論者は、「真理が生起しその生起に人間が与る」ことがハイデッガーの神観念の第一の意義であり、その真理性はこの思惟が思惟され続けるというところにあると論じる。そしてそこから、ハイデッガーにおいては神と人間という二者関係ではなく、真起一神一人間という三者関係として思惟が展開されることを明らかにする。この三者関係において思惟し続けるということのなかに、論者は宗教的追求の新しいあり方を見出している。「真起」を論ずるに至る存在の思惟はどこまでも神の立ち寄りの準備であり、この思惟の延長線上で神に出会うことはあり得ない。それにも拘らずそこにこそ、科学技術時代における宗教のあり方があるというのが、論者の見解である。歴史の根本動向を見据えつつなされるハイデッガーの存在の思惟の解釈として、この見解は大いに説得力のあるものとなっている。

第二に、『存在と時間』における「時間性の拉致(raptus)」という概念を、ルターの『ローマ書講義』に記載された「内なる暗闇の真っ只中に拉致される (in media tenebras interiores rapitur)」という出来事と結びつけた点である。この着眼は先行する研究から示唆を得たものであるが、前期ハイデッガーにおけるルターの影響の重要性を踏まえて、時間性の脱自的統一という根源的現象の理解に一つの道筋を与え得る優れた洞察である。この洞察が、言葉の思惟の考察を急ぐあまり本論文では時間性の理解として十分に展開されていないのが惜しまれる。

以上のように優れた内容をもつ本論文にも、問題点がないわけではない。一つは、ハイデッガーの哲学思想の宗教性を追究することに全力を注いだことで、先行研究についての検討がややおろそかになっている点である。もう一つは、ハイデッガーにおける詩作の言葉と神話の言葉がそれぞれに追究されて、両者の関係が必ずしも十分に明らかにされていない点である。しかしこれらの問題点は本論文の卓越した価値を損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2017年9月22日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。



